

Title	日本における詩経名物学と『詩経名物弁解』：狩野文庫本『毛詩艸木鳥獸虫魚疏』の書入から
Sub Title	A study on onomastics based on Shijing in Japan and Shikyo meibutsu benkai : analyzing notes on Maoshi cao mu niaoshu chong yu shu in the Kano collection in the Tohoku University Library
Author	矢島, 明希子(Yajima, Akiko)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2025
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.59 (2024.) ,p.149- 181
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20240000-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本における詩經名物学と『詩經名物弁解』

―狩野文庫本『毛詩艸木鳥獸虫魚疏』の書入から

矢島 明希子

はじめに

經典中の器物や動植物の名について考証する学問を名物学という。名とは、物事を表す最も基本的な言葉である。しかし、時代や地域が異なれば、同一の物を別の名で呼び、別物を同じ名前と呼ぶなどの齟齬が生じ、実物と名称がかけ離れていくことがある。そこで、名前と物の関係を明らかにしようという学問が起こった。

その発生と展開については、青木正児が「名物学序説」で概述している^①。青木によれば、文献上もつとも早く「名物」の語

が現れるのは『周礼』であるが、秦漢の『詩經』研究の中で始まったと推測している^②。本稿では中国における『詩經』名物学の先駆けである陸機の『毛詩草木鳥獸虫魚疏』二卷（以下、『陸疏』）と、日本における『詩經』名物学の展開について、東北大学附属図書館狩野文庫所蔵本とその書入から考えていきたい。

一、『詩經』と中国の名物学

まず、中国における『詩經』の名物書と名物学の展開について確認する。

(一) 中国の詩經名物書

数多ある『詩經』の注釈のうち、名物に特化した注釈書で最も早いものに、『陸疏』がある。成立年代は三国時代とされ、『隋書』経籍志に名が見える。『陸疏』は『毛詩正義』（以下、『正義』）をはじめとするさまざまな『詩經』の注釈書に引用され、継承された。しかし原本は明初にまったく散佚してしまつたらしく、現行本は明末以降の佚集本であり、『陸疏』の編纂に関する資料は遺されていない。³⁾

内容について例を挙げる。

方秉蘭兮

蘭即蘭、香草也。春秋傳曰「刈蘭而卒」、楚辭云「纫秋蘭以爲佩」、孔子曰「蘭當爲王者香草」、皆是也。其莖葉似藥草澤蘭、廣而長節、節中赤、高四五尺。漢諸池苑及許昌宮中皆種之。可著粉中、故天子賜侯諸蘭、藏衣著書中辟白魚。⁴⁾

まず詩句を挙げて篇題とし、そこに現れる動植物の別名・性質・形状・用途・他書の用例などを記しており、博物学的な要

素を多分に含んでいる。

その後、現在までまつた形で伝わる『詩經』名物書は宋・蔡卞『毛詩名物解』二十卷まで待たなければならぬ。⁵⁾ 宋代の新しい学問の風は『詩經』の名物研究にも新たな動きを引き起こした。代表的な著作を挙げれば、元代には許謙『詩集伝名物鈔』八卷があり、明代には馮復京が『六家詩名物疏』五十四卷として陸疏・鄭樵・蔡卞など先人の書物を比較・考証した著作を編纂し、林兆珂『毛詩多識編』七卷や、呉雨『毛詩鳥獸草木考』二十卷などが編まれた。中でも、毛晋『毛詩草木鳥獸虫魚疏広要』は本草書や史書など多分野の書物を参照して『陸疏』に考証を加え、より博物学的な様相を具えていく。清代になると、考証学の発展とともに毛奇齡『続詩伝鳥名』三卷、姚炳『詩識名解』、陳大章『詩伝名物集覧』十二卷、また図入りの徐鼎『毛詩名物図説』九卷など多くの書物が世に出た。

(二) なぜ『詩經』の草木鳥獸を学ぶのか

『論語』陽貨編で孔子は『詩經』を学ぶ意義について次のように述べる。

子曰、小子、何莫學夫『詩』。『詩』、可以興、可以觀、可以羣、可以怨。邇之事父、遠之事君、多識於鳥獸草木之名。

すなわち『詩』を学ぶことは、詠まれた物からさまざまな比喩を感じ取ること、世の盛衰を見極めること、社会生活を送ること、悪政を諷刺することであり、それをもって近きは父に仕え遠きは君主に仕え、さらに草木鳥獸の名について多くの知識を得ると述べる。最後の「多識於鳥獸草木之名」とは、ただ名を知っているということではなく、詩の興（比喩）を理解するためにその鳥獸草木の性質を理解していなければならならず、従って多識であることが重んじられた。

この一文が後の訓詁学・名物学の発展を後押ししたことは想像に難くない。例えば、現存最古の訓詁の書である『爾雅』について、晋・郭璞は序で次のようにいう。

夫爾雅者、所以通詁訓之指歸、敘詩人之興詠、摠絕代之離詞、辯同實而殊號者也。誠九流之津涉、六藝之鈐鍵、學覽者之潭奥、摘翰者之華苑也。若乃可以博物不惑、多識於鳥獸草木之名者、莫近於爾雅。

まず、『爾雅』が詩の言葉を集め、古代の言葉の意味を弁別した書であると述べ、それこそがあらゆる学問に通じる鍵であるという。そして、博物に精通し草木鳥獸の名について「多識」であるためには『爾雅』に勝るものはないとする。ここで郭璞がまず詩について述べているように、、『爾雅』は『詩経』の研究から始まったと考えられており、『詩経』に用いられる言葉や事物を知るためであったとされる⁽⁶⁾。

郭璞が生きた魏晋南北朝の文学界において、博学多識であることは賞賛の対象であった。枋尾武は、まさに博学多識のための書である類書の歴史を論ずるにあたり、梁の武帝と沈約が栗に関する知識の多寡を競った例を挙げ、こうした風潮が類書を生み出す基盤となったと述べる⁽⁷⁾。郭璞からやや遡るが、『三国志』魏書・王肅列伝注に、魏の儒者・陳禧が学問について問われ、

欲知幽微莫若易、人倫之紀莫若禮、多識山川草木之名莫若詩。

と答えたという逸話が見える。『論語』を踏まえての言であろ

うが、やはり多識の泉源は『詩経』にあると考えられていたといえよう。

(三) 名物学と詩の解釈

学者たちは詩の動植物が何らかの諷刺や道德の喩え(興)であると考えた。しかし、古の名前が今の何にあたり、どのような性質を持ち、何を喩えているのか、何百年と隔たった後世ではしばしば解釈に齟齬が生じる。そして、名物の解釈が異なれば、詩の読み方も変わってくるのである。

名物訓詁の問題については、加納喜光が自らの『詩経』翻訳の経験から召南《鵲巢》「維鵲有巢、維鳩居之」を例に次のように述べる(以下、引用以外の『詩経』の篇名は《》で括る)。

国風・召南の鵲巢篇に、「維^ニ鵲^{カクシツ}に巢有り／維^ニ鳩^{カクシツ}之に居る」と歌われている「鳩」はハトだろうか。ハトならばいかに結婚の祝福にふさわしい詩といえる。しかし『詩経』の注釈である毛伝によると鳩鳩、つまりカッコウなのである。そうすると、この詩は果たして祝婚歌(これが通説)だろうかという疑問が湧く。なぜなら「カッコウがカササ

ギの巢を横取りする」という文句は祝福にふさわしくないからである。そこで筆者はこの詩を諷刺詩と見た。自然界の自由気ままな在り方(カッコウが他の鳥の巢に托卵する習性を踏まえる)と、人間界の仰々しい儀式(車百台の婚資を必要とする嫁取り)とを平行することによって、後者を風刺したと解したのである。(中略)博物語彙の意味の取り方が詩の解釈を左右するという一例である。

同様の問題は幽風《鵲巢》についても言える。幽風《鵲巢》は詩序に、

鵲巢、周公救亂也。成王未知周公之志、公乃爲詩以遺王。
名之曰鵲巢焉。

とあり、聖人・周公旦が幼い成王に贈ったとされる詩である。『尚書』周書・金縢によると、周の武王の死後、幼い成王が即位し、叔父の周公がこれを補佐したが、周公の兄弟である管叔と蔡叔が殷の遺民にそそのかされて周公を貶める噂を流した。周公は疑われ一時周を離れるが、管蔡等を討伐し、成王に《鵲

鴟を贈ったという。《鴟鴞》は、

鴟鴞、鴟鴞、既取我子、無毀我室。

という句で始まるが、この「鴟鴞」がどのような鳥かは二説ある。ひとつは子を奪われ巢を壊されそうになっている小鳥を指すという説であり、これは鄭箋に始まり、⁽⁹⁾『陸疏』や『正義』でも継承された。しかし、宋代に到り、歐陽修『詩本義』や『朱伝』は、冒頭の「鴟鴞、鴟鴞」は子を奪い巢を襲う侵略者への訴えであり、「鴟鴞」はフクロウとみなされた。⁽¹⁰⁾ 前者の場合、鴟鴞は周公が自身を喻えたものであり、後者の場合、鴟鴞は管蔡をそのかした殷の遺民になぞらえられる。⁽¹¹⁾ このような転換の背景には、宋代に起こった漢唐の学問への疑問と、新しい比喩解釈が関係しているだろう。

宋代における詩の比喩解釈の変化については、種村和史の研究がある。種村は召南《螽斯》での「螽斯」の比喩をとりあげ、漢唐の詩経学では比喩と比喩されるものとの間に全的な対応を求めようとする傾向があるのに対し、宋・欧陽修『詩本義』の解釈に到ると、彼らの道徳的感情と常識的な思索に照らし合

せ、比喩と比喩される対象との対応関係は一側面が良いという考えが生まれたとする。⁽¹²⁾ 宋代以降は伝統的解釈に固執せず、道徳的・合理的な解釈を目指すと同時に、本草書など百家の書から広く引用し、観察による知見も加わることにより、⁽¹³⁾ 名物研究はより博物学的な性格を備えていく。

(四)『詩経』と本草学

本草書の引用は、宋代以降の名物学の展開と日本での受容を考えるうえで見過ごせない。青木は、『詩経』に次ぐ名物学の展開の一つに本草方面への展開を挙げ、

本草学は薬性を研究する前提として其の名物学的研究を必須としている。従ってまた名物学にとっては貴重な宝庫である。

と、述べる。⁽¹⁴⁾ 本草学は薬品を研究対象とし、人命に関わることから、正確な知識を要す。自然界に産するあらゆる薬性について、形状や産地・用法・効能など詳細な情報が盛り込まれ、これが翻って『詩経』名物学の考証にも用いられた。例えば、「鵲

鵠（鵠）という鳥について、本草書と『詩経』名物書ではそれぞれ次のようにある。

宋・唐慎微『証類本草』卷十九・禽部下「鵠」¹⁷

鵠、鶩味鹹、平無毒。（中略）大如蒼鵠、頤下有皮袋、容二升物展縮由袋中盛水以養魚、一名逃河。身是水沫、惟胷前有兩塊、肉如拳。云昔爲人竊肉入河化爲此鳥。今猶有肉、因名逃河。詩云、維鵠在梁、不濡其味。鄭云、鵠鵠味喈也。言愛其喈也。喈

明・吳雨『毛詩鳥獸草木考』卷一「鵠」¹⁸

曹風曰惟鵠在梁、傳鵠汚澤鳥也。

鵠水鳥也。（中略）即今鵠鵠是也。或言其胡能盛水以養魚。

本草云如蒼鵠、身是水沫、惟胸前有兩塊肉、列如拳。云昔人竊肉入河化爲此鳥。今猶有肉存因名逃河。

鵠（鵠）は現在のペリカンに比定される鳥である。まず宋代の『証類本草』ではその薬効や用法を挙げ、外形、名称の由来を述べた後、『詩経』曹風《候人》の本文と鄭箋を附すること

で『詩経』の訓詁を援用している。そして、明代の『毛詩鳥獸草木考』では、その『詩経』の名物を理解するために『証類本草』の説を引き、再び本草学の成果を吸収するという入れ子の関係になっている。『詩経』名物学と本草学の関係については李科が論じており、本草学の分野では『詩経』研究から派生した『爾雅』などの小学類、そして地理書や物産書のような博物学的文献に引用された名物記載を通じて『詩経』名物学の成果を吸収し、さらにその本草学の成果を後の『詩経』名物学の分野が吸収することで相互に発展してきたとする。¹⁹ このような指摘は「鵠鵠」の例からもうかがえる。

以上、中国では宋代の新しい学問の気風の中で、名物学も本草学など博物学的な成果を吸収して展開してきたことを確認した。次に、日本における『詩経』名物学の展開を考えていきたい。

二、日本における『陸疏』の受容と出版

日本において『詩経』名物学はどのように受容されてきたのだろうか。『陸疏』の受容と出版については、すでに拙稿①「日本における『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』の受容―国書中の引用に関

する調査」(『斯道文庫論集』第五十五輯、二〇二二年) および拙稿②「日本における『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』の出版―和刻本と図解本」(『斯道文庫論集』第五十二輯、二〇一八年) で検討している。繰り返しになるが、本稿を進めるための前提として、以上の二稿で得られた知見をまとめておきたい。

(一) 江戸時代以前

まず、九世紀末に藤原佐世が編纂した『日本国見在書目録』には『陸疏』の名が見え、日本へ伝来していたことがうかがえるが、十世紀前半の源順撰『倭名類聚抄』では毛伝や鄭箋の引用が散見されるものの、『陸疏』からの引用は見られなかった。その後も十三世紀後半の惟宗具俊『本草色葉鈔』や十六世紀の清原宣賢『毛詩抄』のような国書における『陸疏』の引用は、『正義』や『証類本草』・『本草綱目』に引用されている範囲から出ないこと、これらの文献ですでに生じている名物の混乱をそのまま引用していることなどから、これらの孫引きであったと考えられる。おそらく、『陸疏』は中国同様『正義』など權威的な注釈書に吸収され、日本でも単独では伝わらなかったのではないだろうか。一方で、孫引きとはいえ、本草学的辞書に

引用されている点は、先に述べた名物学と本草字との密接な関係が日本でも継承されていることを示唆している。

(二) 佚集本の流入

江戸時代中期頃になると、明清の佚集本『陸疏』が『説郭』などの叢書に収められて日本へもたらされた。主なものとしては、姚士麟校本(陳眉公普秘笈集など)^③、説郭本(唐宋叢書・続百川学海)、毛晋広要本(津逮秘書・学津討原)、趙佑校本(白鷺書院刊本)、石永齡校本(漢義叢書)、丁晏校本(増訂漢魏叢書など)、羅振玉本がある。

江戸中期頃より、儒者や本草学者の間では、これらの新しい佚集本が参照されるようになった。例えば、宝永六年(一七〇九)に刊行された貝原益軒撰『大和本草』十六巻の巻一「論本艸書」では、本草書以外に参照すべき書物として、花譜などとともに『陸疏』と毛晋『毛詩草木鳥獸虫魚疏広要』(以下、『広要』)を挙げる。さらに『百川学海』・『説郭』を挙げており、これらにも『陸疏』が収録されていた可能性が高い。『大和本草』と同時期に成立した『詩経小識』八巻も『広要』の毛晋注を引用しており、『陸疏』自体の引用も広要本を底本としていると

考えられる。また、安永八年（一七七九）に須原屋茂兵衛が刊行した淵在寛注『陸氏草木鳥獸虫魚疏』四巻も、底本には広要本を用いていることから、『広要』流入以降は広要本が主に用いられたと考えてよいだろう。

（二）元禄刊和刻本『陸疏』

元禄十一年（一六九八）、和刻本『毛詩艸木鳥獸虫魚疏』二巻が大坂の毛利田庄太郎と古本屋清左衛門の相合版で刊行された。²¹今のところ、筆者が実見し得た元禄刊本は、国会図書館所蔵の森立之・約之書入本（わ一二三・一三）および、後述する東北大学附属図書館狩野文庫所蔵本（狩二一七九四・一）のみである。書誌の詳細は拙稿²²に掲載したため、そちらを参照されたい。元禄刊本には大坂の儒医・松下見林（一六三七―一七〇四）の跋があり、そこで、大坂の檜村道菴所蔵本を版元の毛利田氏が書き取り、それに見林が調点をつけて出版したと述べている。²³これは益軒や若水の著述より十年ほど早い、テキストを比較してみると、益軒等が引用する広要本とは異なり、『広要』に先行する『説郛』等に収録されたテキストに近い。

見林は古林見宜のもとで学んだ医家であるが、『異称日本伝』

や『新撰姓氏録』など国史にかかわる著作でも知られている。医薬の分野では、見林の著述を森中虚が書写した『本草治験考』などがあり、見林加點の和刻本『本草綱目』が寛文九年（一六六九）に刊行されている。『本草綱目』は『陸疏』からの引用を含むため、この加點を通して『陸疏』にも通じていたと推測される。

国会図書館と東北大学狩野文庫に伝わる元禄刊本は、いずれも書入が施され、日本の学者がいかに本書を読んできたのかを伝える貴重な資料である。森氏書入本については、拙稿²²で述べたように、森氏親子自身の校訂と、渋江拙斎が『正義』に引用された『陸疏』と校合した成果を森氏が転写したもの²⁴の二種があり、いずれもテキストの校訂に重点が置かれていた。

一方、狩野文庫本は内容にかかわる書入が多く、拙稿²²を發表した際は内容の詳細な検討まで及ばなかったが、本稿では、その後の調査を踏まえて、狩野文庫本書入の内容から日本における『詩経』名物研究について検討していきたい。

三、狩野文庫本『陸疏』の書入

では、狩野文庫本の書人とはいかなるものであるのか。書人は全て同じ手による墨筆⁽²⁾で、全編にわたって施されている。この書人が何に基づくのか、内容についていくつかの事例を引いて検討したい。

(二) 事例一「維鵜在梁」

まず、第一章で取り上げた「鵜（鵜鵠）」の例を見てみよう。
『陸疏』の本文は次のようにある。

維鵜在梁

鵜水鳥、形如鵞而極大、喙長尺餘直而廣、口中正赤、領下胡大如數升囊、好羣飛。若小澤中有魚、便羣共杆、水滿其胡而棄之。令水竭盡、魚在陸地、乃共食之。故曰淘河。

（句読点は引用者による。音訓読仮名・送仮名・返点・連合符は省略した。以下、和刻本『陸疏』の原文については同じ）

これに対し、狩野文庫本書人は篇題付近と欄上に次のように書き入れている。

①篇題…尔雅鵜鵠。郭注今之鵜鵠也。俗呼「淘河」。朱註鵜洿澤水鳥也。俗所謂淘河也。

②欄外…本邦有^レ之俗ニ伽藍鳥ト名ケテ昔年觀場ニ供ス。或ハヲトリト呼フ。大サ鵜ニ三倍ス。領下囊アリ。其翅羽ヲ帶ニ製ス。本草取^レ說ノ形状ニ能相符ス。

（説点がある場合は原文、句点は筆者による。以下、書入については同じ）

書入は『爾雅』及びその郭璞注や『朱伝』などの漢籍を引用し、欄外に漢字仮名交じりの和漢混淆文で日本における名称や習俗を記す。狩野文庫本の書人は、古典籍の引用を主に篇題付近に配置し、そのほかの情報は各篇の末尾や欄外に配置する傾向にある。

では、こうした情報は何に基づくものだろうか。結論から述べれば、筆者はこれらが享保十六年（一七三二）に刊行された江村如亭撰・松岡恕庵鑑定『詩経名物弁解』七卷（以下『弁解』）を転写したものであると考えている。『弁解』巻四・鳥部の「鵜」には次のようにある。

鵯 維鵯在梁曹風侯人章 ① 朱註鵯汚澤水鳥也。俗所謂淘河也○

爾雅、鵯鵯鵯。郭註今之鵯鵯也。俗呼為淘河テ。陸

璣疏ニ形如鵯而大、其鳴自呼コトヲフ、喙長尺餘直而廣フ。口

中正赤、領下胡大如ミ、數升囊ト是ナリ。② 本邦有之俗、

伽藍鳥ト名テ昔年觀場ニ供ス。或ヲ、トリト呼フ。大サ鵯

ニ三倍ス。領下ニ囊アリ。其翅羽ヲ帶ニ製ス。本草綱

目等ニ所說形狀ニ能相符ス。

(句読点・番号及び傍線は引用者による。以下、『弁解』の引用に

ついては同じ)

書入①では『朱伝』と『爾雅』の順序が入れ替わっているも

の、①②ともに『弁解』傍線部①②と同文といってい

う。書入は典拠を明記しないが、『弁解』を参照している可能

性が高い。

(二) 事例二「有條有梅」

次の事例は、『弁解』の二つの条目からの引用したと考えら

れる事例ある。『陸疏』は一篇が詩句を単位とするため、詩句

の中に二物が含まれる場合は両者についてまとめて解説する。

秦風《終南》の「有條有梅」もその一つである。まず『陸疏』の本文を挙げる。

有條有梅

條栢也。今山楸也。亦如下田楸耳。皮葉白色、亦白材理好、

宜爲車板。能濕又可爲棺木。宜陽、共北山多有之。梅樹皮

葉似豫章、葉大如牛耳。一頭尖赤心華赤黃子青、不可食。

桤葉大、可三四葉一聚。木理細緻於豫章、子赤者材堅、子

白者材脆。荊州人曰梅。終南及新城上庸皆多樟栢、終南山

與上庸新城通。故亦有栢也。

これに対し、狩野文庫本は篇題下・篇末・欄外に書入を附す。

① 篇題・朱註与陸璣同。尔雅栢山楸。郭注今之楸又條栢。郭注

似橙味酢ト。此二文アリ。毛陸朱ハ栢條ヲ一物トシテ

即山秋トセリ。此物京北鞍馬山中ニ生。樹葉似楸郷名

未聞栢トハザボンノ類ヲ總テ云フ。

② 欄外・梅朱註ナシ。是標有梅ノ梅ト一物トセリ。栢は楠ト同

シ。俗クスノキト訓ルハ非ナリ。宋祁方物略記ニ童々

若幢蓋葉経歳不凋至春新陳相換ト枿ノ状ヲ云ヘリ。又述異記ニ枿一名交讓木ト云。コノ數ヲ見時ハ今山間庭除ニ此形状ニ彷彿タルモノアリ。搜索スヘシ。

③篇末…按スルニ此章條柚ト解セハ梅ムメト説クヘシ。條ヲ枹ト云ヘハ梅ヲ枹ト見ルモ可ナリ。盖同名異物諸家各有所見不可偏廢。

①篇題の書入は「條」、②欄外および③篇末の書入は「梅」に関する内容である。『詩経』における「梅」は、本篇のほか召南《標有梅》・陳風《墓門》・曹風《鳴鳩》・小雅《四月》に見え、春に花が咲き初夏ごろ実をつけるいわゆるウメに比定される詩篇と、「枿」あるいは「楠」という別の樹木と解釈される詩篇がある。これらは同名異物として混乱を招くため、毛伝をはじめ多くの学者が注を附して議論してきた。『弁解』はどのように弁じたのか、卷三・木部から「條」と「梅」の条を挙げる。

條 有_レ條有_レ梅_{奈風終南章} ①朱註條、山_ハ楸也。皮_ク葉白、色亦白、材_ニ理好、宜_ニ為_二車版_ト。○爾雅、楸_ハ山_ハ楸。郭注、

今之山_ハ楸又條柚_ハ。郭注似_ニ橙味_シ酸_ニ。明_ニ條楸_一二文ヲ出セリ。毛傳陸_ニ璣_一ハ楸條ヲ一物トシテ即山_ハ楸トセリ。此何_レノ的_ニ證_一アリヤイブカシ。草木考ニハ郭璣ヲ是トシ陸璣ヲ誤トス。集傳ハ陸_ニ說_一ニ從ヘリ。①山_ハ楸_ハ京_ニ北_ニ鞍_ニ馬_ニ中_ニ生_一ス。樹_ニ葉_ニ似_ニ楸_一郷名未_レ聞_カ。柚トハザホンノ類ヲ惣テ云フ。今俗通シテ柚ト呼モノハ袖中ノ小者ナリ。

梅 見_ニ于_一上章 ②朱傳無註。朱傳註ヲ加ヘサルハ前ノ②

標有_一梅ノ梅ト一物トシタルナリト。陸疏廣要ニモ云ヘリ。陸璣爾雅梅、枿ヲ釋シテ皮似_ニ豫章_一葉大如_ニ牛耳_一、荊州人曰_レ梅、終_ニ南_ニ及_ニ新_ニ城_ニ上_ニ庸_ニ皆_ニ多_ニ樟_ニ枿_一ト云ハ此章ノ梅ヲ梅杏ノ梅トセザルナリ。名物疏及_レ說_レ約ナドモ陸氏ニ從_テ梅枿ノ梅トナシテ解_ケス。②枿ハ楠ト同シ。俗クスノキト訓ルハ非ナリ。宋_ニ祁_ニ方_ニ物_ニ畧_ニ記_ニ二_ニ章_一々々若_ニ幢蓋_一葉經_レ歳不_レ凋至_ニ春_ニ新_ニ陳_ニ相_ニ換_一ト。枿ノ状ヲ云ヘリ。又述異記ニ枿一名交讓木ト云。コノ數證ヲ見寸ハ、今山間庭除ニ此形状ニ彷彿タルモノアリ。搜索スベシ。正字通ニ爾雅說_一文未_レ可_レ信_ス、梅、枿ト釋スハル誤ルト云ヘルハ一偏ナリ。③按スルニ此章條柚ト解セハ梅ハムメト説クヘキカ。條ヲ山_ハ楸ト云ハ、梅ヲ枿ト見ルモ可ナリ。盖同名

異物、諸家各有_レ所_レ見不_レ可_二偏廢_一。^ス

この二つの条目は『弁解』でも連続して配されており、『弁解』「梅」の③に「此章條柚ト解セハ梅ハムメト説クヘキカ。條ヲ山楸ト云ハ、梅ヲ桮ト見ルモ可ナリ」というように、詩義からして両者の性質は相関して考えるべきものであった。

狩野文庫本書人は①篇題下に『弁解』の「條」の①を写し、②欄外および③篇末には「梅」の②③を写している。ただし、『弁解』では①の前半に『朱伝』の文を掲載しているが、書入は①篇題下に「朱註与陸璣同」と記すのみである。これは書入先が『陸疏』そのものであることから、繰り返しを避けるためであろう。²⁸⁾その後『爾雅』に続く文は『弁解』とほぼ同じである。ただし、『弁解』の「明二條桮二文ヲ出セリ」を書入は「此文アリ」とするように節略が見られる。

「梅」についても②の「標有梅ノ梅ト一物トシタルナリト」は、『朱伝』が「有條有梅」の「梅」に注をつけなかったのは先に出てくる「標有梅」（国風《召南》）の「梅」と同じと考えたためという説明であるが、書入②は『弁解』の「朱傳註ヲ加ヘサルハ」を省略し簡略化している。その後も『陸疏』に関する

議論は省き、②「桮ハ桮ト同シ。俗クスノキト訓ルハ非ナリ」や③「此章條柚ト解セハ梅ハムメト説クヘキカ。條ヲ山楸ト云ハ、梅ヲ桮ト見ルモ可ナリ」のように、「梅」に関する要点を抽出して転記しているものと考えられる。

このように「有條有梅」の事例では、『弁解』の二つの条目から解釈を取り合わせ、一部要約して転記したといえよう。こうした工夫は、このほか一句の中に複数の動植物が含まれる「其裡其桮」や「弋鳬與雁」「去其螟螣及其蠹賊」「螟蛉有子有子蜾蠃負之」も同様であった。

（三）事例三「方秉蘭兮」

事例一、二は『弁解』を簡略化しつつも、『弁解』をほぼそのまま引き写しているが、さらに要点を絞っていると思われる書入も見られる。次に、巻上冒頭の「方秉蘭兮」の書入を紹介したい。『陸疏』の本文は先に挙げたが、ここでもう一度和刻本の本文を挙げる。

方秉蘭兮

蘭卽蘭香艸也。春秋傳曰、刈蘭卒。楚辭云、纫秋蘭。孔子

曰、蘭當爲王者香艸、皆是也。其莖葉似藥艸澤蘭。但廣而長節、節中赤、高四五尺。漢諸池苑及許昌宮中皆種之。可著粉中。故天子賜諸侯蒔蘭。藏衣著書中辟白魚也。

これに対して、篇題下・篇末・欄外に次のような書入が附されている。

①篇題…朱注与陸同。

②欄外…蘭、和名ラニノ花、又名フジハカマ、和漢共ニ古ヘ蘭ト称スルモノ皆今ノ茅葉黃花ノ蘭花ニアラス。燕尾香都梁香と後世ニ云モノ古ノ蘭也。陸璣ノ説明ラカ也。

今本邦山澤有之葉山蘭似テ有岐燕尾ニ類ス。秋花攢簇ス。粉紅色柯葉花共ニ香ハシ。採取代ニ容臭ニ用ヘシ。

花史事林廣記ノ説誤レリ。

③篇末…古ヘ和歌ニフジバカマ主ハ誰トモシラ子ドモ白ツユノコボレテ匂フ野ヘノ秋風。古今ニ秋風ニホコロビヌラジフシバカマツ、リサセテウキリキリスナ蛩鳴ク。此等ノ歌何レモ古蘭ヲ咏ス。今ノ幽蘭ニアラス。

『朱伝』から和歌まで広く引用が見られる。では、『弁解』卷一・草部「蘭」にどのような見えてみよう。

蘭 方秉ニ蘭ヲ兮鄭風 有ニ蒲與レ蘭陳風 ①朱傳蘭也、其莖

葉似ニ澤蘭ニ、廣而長、節ニ、中ニ赤高四一五尺〇②和名ラ

ニノ花、又フジバカマ。和漢共ニ古蘭ト稱スルモノ、皆

今茅葉黃花ノ蘭花ニアラス。楚騷九畹ノ蘭、孔子王

者香ト稱ハ②即後世燕尾香却梁香ト云モノ。是乃古

ノ蘭ナリ。陸璣・羅願・朱子・時珍輩委ク能識別シ、

千歳ノ惑ヲ泮キ釋ス。可レ悅之甚ナリ。真蘭、今本邦山

澤有之、葉山蘭ニ似テ有岐、燕尾類ス。秋花攢簇、

粉紅色柯葉花共香シ。採リ収代ニ溶臭用ヘシ。③古

和歌、フジバカマ主ハ誰トモシラ子ドモ白ツユノコボレテ

匂フ野ヘノ秋風、古今ニ、秋風ニホコロビヌラジフシバ

カマツバリサセテウキリキリス蛩鳴。此等ノ類、皆此蘭ヲ咏。今幽

蘭ニアラス。然ルニ顧夢麟・黃山ニ谷及②花史・事林

廣記ナドニ古ノ蘭ヲ知ラズ。今ノ蘭花ヲ以強九畹ノ蘭ト

シ、附ル會費ヒ辨ハ可レ供キ絶倒ナリ。又旨別源南游東

歸集ニ答ル問ニ蘭無ニ香ノ序詩アリ。是詩通篇不レ知古

蘭^ヲシテ妄^ニ辨ズ。牽強ノ甚ナリ。此等ノ事碎頭微末ト雖ヘドモ格物之一端、學者緊要ニ吟味ベキコトナリ。餘怡顔齋蘭品中ニ具レリ。故略ス。○陳繼儒珠舫、世稱三友、竹有節而香^ニ花、梅有花而香^ニ葉、松有葉而香^ニ香、惟蘭獨併有^レ之ト。此語可玩^キニ似タリト雖ヘドモ認^テ幽蘭、而不知^ラ真蘭ノ意、言外ニ彷彿タリ。

まず、書入は①篇題下に「朱注与陸同」として『弁解』①の『朱伝』を省略するのは事例二と同様である。次に、②欄外の書入は『弁解』②に相当する。ここでも語順の入れ替えや省略が起きているが、問題は書入②の二重線で示した部分である。書入が「陸璣ノ説明ラカ也」とするのは、『弁解』②で「陸璣・羅願・朱子・時珍輩委ク能識別シ、千歳ノ惑ヲ泮釋ス。可悦之甚ナリ」と感慨を述べた一文に当たると見てよいだろうか。同じく書入②の二重線「花史事林廣記ノ説誤レリ」も、『弁解』②の「花史事林廣記ナドニ古ノ蘭ヲ知ラズ」以下を極めて端的に言い換えたものと考えられないだろうか。『弁解』は『花史』・『事林廣記』のほかに顧夢麟・黄山谷（庭堅）を挙げ、「古ノ蘭ヲ知ラズ」としたうえで、「今ノ蘭花ヲ以強九畹ノ蘭トシ、附

會費辨ハ可供絶倒ナリ」と批判するが、書入はこれらを省き、「説誤レリ」と正誤に帰している。そして、和歌を引く③篇末の書入は『弁解』の③に該当するが、『弁解』が「此等ノ類、皆此蘭ヲ咏」とするところを、書入は「此等ノ歌何レモ古蘭ヲ咏ス」とし、言い換えている。

これらも『弁解』に基づくとすれば、狩野文庫本書入は『弁解』をただ転写しただけでなく、要点を整理して書き入れていると考えられよう。

（四）事例四「流離之子」

事例三のような言い換えがより顕著に顕れるのが巻下「流離之子」（拙風《旄丘》）である。「流離」について、『陸疏』は次のように解釈する。

流離之子

流離、梟也。自關西謂梟爲流離。其子適長大、還食其母。故張奐云、鵲鵲食母。許慎云、梟不孝鳥是也。

これに対し、書入は次のように注を附す。

篇題…朱傳流離漂散也。今此說二從フテ鳥ノ名トセズ。

「流離」は『爾雅』積鳥の「鳥少美長醜爲鸛鵒」に郭璞が「鸛鵒猶留離、詩所謂留離之子」と注するように、フクロウの一種と考えられていた。しかし、宋代にはこの解釈に疑問が起り、『朱伝』は鳥の名ではなく「漂散」の意と解した。以降、朱子学の系統では多くが非鳥名説を踏襲している。『弁解』巻四・鳥部でも次のように解する。

流離 流離之子鄒風旄丘章 朱傳、流離漂散也。○流離ハ鳥名ニ非ラルコト甚明ナリ。毛傳流離鳥也。少好長醜ト云ヘリ。陸璣疏ニ自關而西謂梟為二流離ト。此說ニ據テ草木考禽部ニ收ム。習而不察拘泥之甚ナリ。談ル詩者漂散トナシテ讀ムヘシ。

この事例で書人と『弁解』が一致しているのは『朱伝』の部分のみである。書人を書写者の自説と見ることも可能だが、事例一や二のように多くが『弁解』を用い、事例三のように『弁

解』の説を要約する例が見られることから、この事例も『弁解』の大意をとったものではないだろうか。

(五) 事例五「集于苞杞」

最後は、和刻本『陸疏』と書入では基づく『陸疏』のテキストが違うのではないかと推測される事例である。和刻本は「集于苞杞」について次のように説く。

集于苞杞^②

杞、柳屬也。生水傍樹如柳、葉麤而白色、木理微赤、故今人以爲車轂。今共北淇水傍魯國泰山汶水邊、純杞也。

これに対して、書入は次のようにいう。

①篇題…朱注与陸璣同。俗名コブヤナキ。孟子ニ杞柳ト云モノ是也。葉似柳少ク皺シヅメアリ。今箕邊ヲ飾リ箱篋ハコヲ作り剔牙杖ヤウシヲ製ルモノナリ。

②篇末…詩ニ所咏ノ杞ニ三品アリ。小雅集于苞杞、南山有杞ト云モノ各別物ナリ。

「杞」は鄭風《將仲子》・小雅《四牡》・同《杕杜》・同《南山有台》・同《湛露》・同《四月》・同《北山》と、小雅に多く詠われた樹木であるが、事例二の「梅」同様、同名異物が存在したと考えられ、『弁解』でも本部に二つの「杞」が立てられている。狩野文庫本の書人はおそらく次の解釈を転写したのだらう。

杞 無^{コト}折^カ我^ヲ樹^ハ杞^ハ 鄭風將仲子章 朱註杞柳屬也。生水傍樹如

柳葉窺而白^{ニシテ}色理微^{ニシテ}赤。○①俗名コブヤナギ。朱傳陸璣

ノ文ヲ引テ釋ス。①孟子ニ杞柳ト云モノ即是又柜柳トモ

云フ。致^ニ富奇書^ニ箕^ハ柳^ハ一名楊^ハ柳^ハ云モノ此物ナリ。①葉似

レ柳^ハテ少ク皺アリ。今箕邊ヲ飾リ、箱篋ヲ作り、剔^ハ牙杖ヲ

製^ハルモノナリ。草木考ニ杞^ハ葉圓^ハ如^ハ梨^ハト云ハ、白楊ヲ誤

認^ハテ杞トセルナリ。白楊ト杞トハ二物ナリ。不^レ可^レ

混^ス。②詩ニ所^{スル}詠ノ杞ニ三品アリ。小雅集于苞杞・南

山有杞ト云モノ各別物ナリ。後ノ杞條ト並^フ考^ヘベシ。

書人が『朱伝』を省略する点はこれまでの事例と同様である。

その他も省略はあるものの、傍線で示した部分は『弁解』の文

言を比較的忠実に写している。

しかし、『弁解』のこの条は、冒頭に挙げるように鄭風《將仲子》の「無折我樹杞」についての解釈である。一方、この説が書き入れられた和刻本『陸疏』の篇題は「集于苞杞」（小雅《四牡》）であった。『弁解』は「集于苞杞」の「杞」については、別条を立てて「今俗毛枸杞ト呼フ」と解しており、篇題だけで見れば、同名異物であるために書人が転写する条目を誤ったかのように見える。ただし、和刻本『陸疏』も本文を読めば「杞、柳屬也」と、ヤナギについて述べており、書人は『陸疏』の本文と問題なく対応しているのである。

そこで、『陸疏』のほかの伝本を確認すると、姚士麟校本・說郭本・毛晋広要本・趙佑校本・石永齡校本・丁晏校本・羅振玉校本のうち、やや早期に成立した姚士麟校本・說郭本と、その系統を継いだ石永齡校本では和刻本と同様に篇題を「集于苞杞」に作っているが、毛晋広要本の段階で「無折我樹杞」に改められていることがわかった。^③ また『正義』を参照しても、「杞、柳屬也」から始まる『陸疏』は、鄭風《將仲子》の「無折我樹杞」の疏の中にのみ引用されていることからすれば、広要本の改訂は妥当だろう。そのほか、趙佑校本・丁晏校本・羅振玉校

本も毛晋に従って改めている。

このズレは、和刻本が古い姚士麟校本・説郭本の系統に当たり、『弁解』は広要本系のテキストに拠っていることを示しているといえよう。そして、書入の主は両者を対照し、適当な注釈を選択して書き入れていることがわかる。

以上、日本における『陸疏』研究、引いては『詩経』名物研究の一例として、狩野文庫本書人の事例を提示した。狩野文庫本の書入は出典を明記していないため、『弁解』の刊本そのものではなく、さらにその抄録などから引かれた可能性も考えられるが、根幹に『弁解』があることは、事例一―三、五の類似性から見て明らかといっていいただろう。従って、狩野文庫本は『詩経』名物学の祖である『陸疏』に、日本の『詩経』名物学の成果を整理し、補完した一本といえるのである。

四、『弁解』の普及と評価

では、江村如亭の『弁解』は江戸後期の『詩経』名物学においてどのような位置を占めていたのだろうか。『弁解』の出版

と後世への影響について考えていきたい。

(一)『弁解』の出版

『弁解』の出版については陳捷氏がすでに「経学註釈と博物学の間」(同編『医学・科学・博物―東アジア古典籍の世界』勉誠出版、二〇二〇年)でまとめており、本稿もこれに依拠するところが大きい。まず、慶應義塾図書館蔵本(二―二―四)によって『弁解』の書誌を示す。

詩経名物辨解七卷 和大四冊^③

江村(如亭)(如圭)撰 松岡(恕庵)(玄達)鑑定

享保十六年刊(京・唐本屋八郎兵衛)

香色卍繫地花散文型押表紙(二六・八×十八・〇厘)、左肩に子持杓刷題簽「詩経名物辨解 幾」を貼付(首冊のみ後補題簽に墨書)。見返は「松岡玄達先生鑒定／(低二格)江村如圭纂述」／詩経名物辨解／不許翻刻千里必究／不認此印者係偽刻「豫章堂鏤梓」とし、上部やや右寄りに魁星印、左中央に「江氏／信印」方形陰刻朱印記を捺す。前附には「詩経

名物辨解叙」(享保十五年伊藤東涯)、自序「詩經名物辨解自叙」(享保十六年江村如亭)、「詩經名物辨解目録」を有す。卷首は「詩經名物辨解卷一／(隔一行、低二格) 松岡玄達先生鑑定 平安江村〈如圭〉纂述」とする。³⁴⁾【第一冊】卷一(草部七十条)、【第二冊】卷一(草部三十二条)、卷三(木部六十六条)、【第三冊】卷四(鳥部四十四条)、卷五(獸部二十六条)、【第四冊】卷六(魚部十九条)、卷七(蟲部二十八条)。匡郭は四周单边(十八・二×十二・六糧)、無界、每半葉十行、字数は二十至二十二字前後。漢字仮名交じり文で、漢籍からの引用は漢文のまま示し、返点・連合符・音訓読仮名・送仮名を附す。版心は白口単白魚尾。大尾に刊記「享保十六年辛亥四月／(低四格) 京師書林 唐本屋八郎兵衛鏤刻」あり。

『弁解』は伝本が多く、国書データベースに登録されている件数だけで七十七件に及ぶ。刊記には「享保十六年辛亥四月／京師書林」の後に続く書肆名を「唐本屋八郎兵衛」ではなく「唐本屋宇兵衛」「中井平治郎」「林伊兵衛」に作る伝本を確認している。これらはいずれも同版であるが、版面の状態などから後印本と見られる。おそらく、唐本屋八郎兵衛本が最も早印であ

ろう。³⁵⁾さらに、嘉永三年(一八五〇)には京都の丁子屋貞七・鉾屋安兵衛・江戸の須原屋茂兵衛・大坂の敦賀屋九兵衛の相合版で「享保十六年〈辛／亥〉四月元刻／嘉永三年〈庚／戌〉九月補刻」とする版が印行されている。³⁶⁾陳捷が指摘するように、この補刻本では京都だけでなく大坂や江戸の書肆も印刷販売に関わっており、本書が長きにわたって流布したことがわかる。『弁解』以前、日本人による詩經名物書は宝永六年(一七〇九)の稻生若水『詩經小識』(以下『小識』)があるが、写本で伝わるのみで出版はされなかった。³⁸⁾従って、印刷物として流布したという点でも、日本の『詩經』名物書の歴史の中で『弁解』は画期的な書物といえる。

(二) 江村如亭の学問と松岡恕庵

著者の江村如亭は名を如圭、字を希南、別号を復所という。儒者・江村毅庵(一六六一―一七三四)の次男として生まれ、宮津藩の青山侯に藩儒として仕えた。本草学は松岡恕庵(一六六八―一七四六)の門で学んだ。³⁹⁾『弁解』の伊藤東涯序には、江村氏が代々儒医の家系であり、如亭は早くから勉学に耽り、中でも本草学に長けていたことが述べられている。

詩經名物辨解叙

(前略) 江村氏之先世、通儒醫術、續德百年、多翔仕途懋名美、而穀庵翁相識最熟矣。其仲子如珪氏、夙耽學、尤精本草、多識於鳥獸艸木之名、博羣籍、旁參哲匠、上下古今、訂訛覈眞、其功勤矣。近携其所輯詩經名物辨解四卷來、則事簡而物別、可以爲學詩之一助。豈翅不致食螾蟥之誤已哉。吾知江村氏之福未艾也。及其請序、書以勗之云、

享保庚戌九月伊藤長胤譔

東涯序は本書について「則事簡而物別、可以爲學詩之一助」と極めて簡明に評するが、如亭の自序では本書の編纂の目的を具体的に述べている。

詩經名物辨解自叙

(前略) 蓋考古博物者、固君子之所爲難、而不可以不研究者也。然世之學者、多以爲屑越而置之不講、故儒生家多不識田野之物。農圃氏終不識詩書之旨。二者無絲毫合、致使鳥獸艸木之學不傳也。噫、世代既遐、種類日夥、玉石難辨、

紅紫亂朱。閱此薈不辨則誣前惑後之尤爲不細也。欲明斯道、而實乏其人、即松岡先生出、按五方而詳名物、咨漁樵而資博采、一卉一木一毛一羽、莫不究其理明其原。而是非真偽不能逃其鑑。以卞和止泣、宋愚免笑也。謏劣如〈余〉、不能及人。親受先生辨物正名之餘教。銖積絲累分寸躋攀、雖未詣精奧、粗明斯道、稍得其趣焉。歲庚戌、嬰疾踟躕、病骨峻嶮、漫爾無聊。因憶如三百篇昆蟲草木、同實殊名、同名岐釋者、非素嫻審辨、則詩旨乖戾、習誦訛繆者、既居半矣。〈余〉以爲痛恨而精神昏暗、未暇是正、同秋獲少痊、於是不揣庸鄙、妄竭一得之愚、逐種辨考證正訛、棄繁就簡、綴以國字。始成篇帙計卷有七、名曰詩經名物辨解。訂以先生之鑒定。此書也、匪欲沽名自銜、冀爲誦三百者作津筏耳。大人先生幸其無以予小子。享保辛亥春之孟、題于簡端梓以傳云。

江村如圭

ここには自らの病についても言及がある。如亭はこの翌年、享保十七年（一七三三）に没した。如亭の生年は不明であるが、父の穀庵が享保十九年（一七三四）に六十九歳で没しているこ

とからすれば、まだ老境に到る前にこの世を去ったといえよう。

東涯が「博羣籍、旁參哲匠、上下古今、訂訛覈眞」と評したように、確かに『弁解』は『朱伝』を基礎に和漢の書から用例を引く。その中にはもちろん『陸疏』も含まれる。ただし、『弁解』の特徴は、それに加えて形状など実物の観察から得た知識に優れている点である。この点は、自序で「儒生家多不識田野之物。農圃氏終不識詩書之旨」と述べるように、古典を弄するのみで実際の草木鳥獸に対する学識の乏しい儒者への不満を自ら解消せんとするものであった。

如亭の学問的系譜について、師のさらに師である稻生若水から見ていきたい。若水・恕庵の学問については太田由佳の研究に詳しい⁽⁴⁰⁾。本稿でも太田の研究によってたどっていく⁽⁴¹⁾こととする。まず、若水の学問的な特徴を太田は次のようにまとめている。

① 儒学、とりわけ朱子学（宋学）を基礎とし、幅広い学問に通じていた。

② その本草・物産に関する知識は若水以前のものと比較して実見（実験）に裏打ちされたものであった。

③ 若水自身は、本草学に従事するには書物上の学識（文字）に併せて医薬知識（方技）にも通じていることが肝要と

考えていた。

『詩経』名物研究について言えば、若水の時点ですでに実物の観察を重視する姿勢は見られるものの、著作『小識』は主に漢籍から引用して集成する形式をとり、実際の観察によって得られた知見は多くない。

恕庵も朱子学を奉じたことは若水と同様である。太田は恕庵の本草学に対する学問的な意義づけを次の四点にまとめている⁽⁴²⁾。

① 「格物」「正名」は聖人のまず行うべき事である（『論語』『大学』）。

② 「格物（物に格る）」とはつまり「窮理」であり、個別の事物についてそれに内在する理を明らかにすることである（朱子学の命題）。

③ 「正名（名を正す）」とは、個別の事物についてその〈名〉と〈実〉とを一致させることである。

④ 本草研究とは、特に自然物について「格物」と「正名」とを実践することにはかならない。

『弁解』の自序には「親受先生辨物正名之餘教」とあり、上掲「蘭」でも「此等ノ事碎頭微末ト雖ヘドモ格物之一端、學者

緊要ニ吟味ベキナリ」と述べていることから、恕庵の「格物」「正名」を重んじ、実物を探求する態度は如亭にも強く引き継がれている。⁽³⁾

さらに、このような精神より発して、恕庵の本草研究の方法について、太田は次のように整理する。⁽⁴⁾

① 儒医を兼ね字び群書に博通する―すなわち文に達者で医薬の知識があり、なお儒書・医書に限らない幅広い書物に通じていなければ、物類の名を明らかにする仕事は不可能である。⁽⁵⁾

② ①のような素養に加えて、多くの人から意見を集め、さらにそれを複数人で話し合うなど多角的な検討を行うことが肝要である。

恕庵は研究対象について群籍を渉獵するのみならず、実際に観察し、さらに人々と一緒に検討する方法を採った。如亭は『弁解』の自序で師について「詳名物、咨漁樵而資博采、一卉一木一毛一羽、莫不究其理明其原」と評している。その姿勢は『詩経』名物研究にも現れており、恕庵の講述とみられる『詩経物産考』（国会図書館、特一・二〇九一）は、漢籍だけでなく国書も引用して別名や性能について記したものであるが、いくつか

の条目では諸説の正誤を検討しており、若水の「小識」と比べて批判的精神がうかがえる。

これら若水・恕庵の『詩経』名物研究を引き継いだのが如亭である。江村如亭撰・水野（皓山）（業広）編『採覧随録』には、名物を明らかにするために实地調査や採集を行い、探究する姿勢がよく記録されている。本書は享保元年（丙申、一七一六）四月二十八日から十一月十三日までの採集の記録を、蘭山門下の水野皓山が品種（薬種）によって編次しなおしたもので、現在は岩瀬文庫（二七・二七）と杏雨書屋（杏三五六六）に写本が伝わっている。⁽⁶⁾一年に満たない記録ではあるものの、採集地が詳細に記されており、その採集は京都の中だけでなく尼崎まで及んでいる。そして、いくつかの品種については恕庵に教えを請うている。例えば、

真蘭（前略）六月十四日御菩薩池ニテ採、恕庵ニ示ス。
此モ真蘭花ト云。重示ニ山蘭ト云。

ナハシロクミ
木半夏（前略）九月朔木半夏の実を勝軍山ニ採、恕菴ニ示ス。一年二度モナルナラント云。彼小樹ニ有実。

などである。『弁解』でも自序に「訂以先生之鑒定」といい、恕庵の鑑定が加わっている点からも、このような師弟関係は変わらず続いていたことがうかがえる。

さらに、恕庵の物産会の席上で見聞したと思しき記録もある。

斑豆（前略）七月廿二日、飯山ヨリ来、木曾方言聞之、立珉恕庵席上、七里香ハ香豆ナラント。恕庵又云豆ニ廿ホド有。

この記述からは、恕庵はさまざまな物産を持ち寄って検討する物産会を開催しており、それに如亭も参加して遠方の物産に関する情報を得ていたことが見て取れる。『弁解』には前掲事例二「條」に「山楸ハ京北鞍馬中ニ生ス」というように、京都近郊の植生のほか、草部「繫」には佐渡の産品に関する記述が見える。

此高他十州ニ有レ之コトヲ聞ス、但、佐渡州ニ産ス（中略）此二種共ニ白蒿ニシテ但佐渡州白ヨモキヲ真トスヘシ。

このような遠方の情報について、上掲『採覧隨録』の「斑豆」が飯山からもたらされたと記録があるように、佐渡の情報も物産会を通じて得ていたのかもしれない⁽³⁰⁾。

朱子学を基礎とし、実見を重視することは恕庵の師・若水の重視するところでもあり、上述した如亭の学問への姿勢は、恕庵の師である若水から継承されてきたものであるが、若水の『小識』は漢籍の引用、すなわち群籍の博搜に主眼が置かれ、採集による知識は多くなかった。次の恕庵は群籍の範囲を国書にまで広げ、さらに実物の観察を重視するとともに、物産会を開くなどして同士や門人等と検討し、知識を共有していった。この物産会には遠方からの情報もたらされ、各地の知識が門人等にも共有された。そして、『弁解』の編纂は、こうした学問環境が本草の分野だけでなく、『詩経』の名物研究へ反映された成果と考えられよう。

（三）『弁解』への評価

『弁解』が広く世に行われた後、各世代の本草学者がその再検討を行っている。まずは『本草綱目啓蒙』などの著者として

知られる小野蘭山（一七二九—一八一〇）である。蘭山は如亭と同じく松岡恕庵に師事したが、蘭山が恕庵に入門したのは寛保元年（一七四一）年のことであり、この時恕庵は七十四歳、蘭山は十三歳であった。如亭が没してすでに十年が過ぎており、同門といっても互いに面識はなかったと考えられる。蘭山には『詩經名物弁解正誤』（以下『正誤』）と題された一書がある。

『正誤』は、国会図書館（特一一八八三）に写本が伝わっており、巻首に「蘭山 小野先生口述」とあることから、蘭山の講義を弟子がまとめた書と考えるのが妥当だろう。内容は書名の通り、『弁解』の説に対して正誤を批評し、さらに自説をもつて補うものである。例えば、草部冒頭の「苢」について次のようにいう。

苢 アサ、ノ説可也、萍蓬草カハホネニ似テ薄ク小シト云、此ハ大イニ異ナル故非也、カハホネ大ナル葉ナリ、本條ハ甚小也、水艸ニシテ水ノ淺深ニ從テ長短アリ、夏黃花アリ五瓣也。

（句読点は引用者による。以下同じ）

また、前章事例二で挙げた木部「梅」について、『正誤』は「栂ツグ」に作り、

栂 交讓木ト云ハユツリハ也、楠ノコト也、ユツリハノ内ニ牛耳ニ似タルヲ楠ト云、即大葉楠ノコト也。

と、「栂」についてのみ述べる。これは『弁解』の「陸璣爾雅梅、栂ヲ釋シテ皮似豫章葉大如牛耳、（中略）名物疏及説約ナドモ陸氏ニ從テ梅栂ノ梅トナシテ解ス。栂ハ楠ト同シ。（中略）又述異記ニ栂一名交讓木ト云」という説を受けてのものだろう。『正誤』ではこれら典籍の考証が省かれており、日本における名と実物の同定とその形状の記述に重きが置かれている。

そのほかの特色を挙げるとすれば、木部「栲」について、『弁解』が「此物本邦ニ此形状ニ相似タルモノ京北天台山及鞍馬山中ニ有リ、博問訪索シテイヨイヨ其為栲否ヲ決スベシ」と特定を保留したのに対し、『正誤』は、

栲（前略）此物木部ニ形状……トアルハ、メシツブノ木カシヲツミ也、漢名緜木、此松岡ノ説デ當ル也。本条ニ

アラズ。

と、恕庵の説を引いて回答する例や、木部「榧」について、

榧 ギヨリウ、松岡先生ノ時ハギヨリウ未來、故ニレモ

ミニ當テアレドモ榧柳トツッキテギヨリウニ當ル。

と述べるなど、新たにもたらされた植物について紹介する条目も見られる。本書の成書年代は不明だが、如亭や恕庵の時代から名物研究の変遷を伝える好資料といえよう。⁽³³⁾

次に、『正誤』より一世代下るものとして山本亡羊（一七七八一―一八五九）の『詩経名物弁解釈義』（以下『釈義』）がある。亡羊は京都に山本読書室を開いた儒医・山本封山の次男で、兄の早世により読書室を継いで門人に教えるとともに、文化五年（一八〇八）からたびたび物産会を開催するなど本草学・物産学に注力した。本草学は寛政五年（一七九三）に十六歳で蘭山に入門し、蘭山が江戸に移った二十一歳まで蘭山に学んだ。⁽³⁴⁾

『釈義』は巻首の編著者名に「亡羊山本先生講述／出雲藩簡齋

山本良臣徵聖録」とあることから、これも亡羊の講義を弟子が筆録したものと考えられる。記録者の山本良臣（一八一〇―一八七三）は出雲藩医学教授山本家の三代目に当たり、天保十三年（一八四二）から十五年（一八四四）にかけて京都に遊学、山本亡羊に本草学を学んだ。杏雨書屋に『釈義』の写本が二部（杏五二九〇、杏五二九一）伝わっており、そのうち杏五二九〇は「雲藩茶梅園藏板」の用箋を用いている。良臣が亡羊の講述を筆録したほかの写本にも同様の用箋が用いられていることから、該本もこの時期に良臣が筆録した伝本と考えられる。⁽³⁵⁾

本書も『弁解』の説に対して是非を論じ自説を展開する。例えば、前章事例三で挙げた草部「蘭」では次のようにいう。

蘭 フシハカマ、古哥ニモアリ。山野ニ沢山アリ、尤下隰ノ地ニ多シ。和名ラントツクハアシ、。フシハカマニテ宜シ。ラニハヤハリ幽蘭ノ如シカラニテ多ク幽蘭ニ混シトク。陸機朱子時珍ノ説宜シ可從。古ハ香具ナキ故此ヲ容臭トスルナリ。コノ葉ハイツマテモ香ノサラヌモノ也。

（句読点は引用者による。以下同じ）

蘭山の『正誤』では恕庵の説を採るところが多くあったが、亡羊の批評は恕庵の鑑定にも及ぶ。草部「著」について、

著 ノコギリサウ、ハゴロモサウトスルハアシ、松岡先生鑑定説ハアシ、。

と述べる。『弁解』は「著」の和名を「俗名ハゴロモ、又名ノコギリ草」としており、鑑定は「旧説ニ以著為羽衣草、恐非是再加尋索」と批評するものであるが、亡羊は此の両方を「悪し」とする。

また、木部「梓」で、

梓 コノ弁甚是也。(中略) 蘭山已来コノ説ニ従フナリ。

とするなど、蘭山の説についても言及がある。このように蘭山の説をとる場合もあれば、上述の「梅(栴)」について、蘭山が「交譲木ト云ハユツリハ也、楠ノコト也」としていたところを、亡羊は、

梅 未詳。今山間通 云云ハユツリハノコトナリ、交譲木ノ名ニヨリ楠トスレドモコレハ非ナリ。形状的當セサルナリ。

と、蘭山とは異なる説をとる場合もある。『釈義』でもやはり前時代の名物研究に対する修正を見て取ることができるだろう。以上、『弁解』に対する批評を蘭山の『正誤』と亡羊の『釈義』から検討した。両書とも正確な成書年代は不明だが、『正誤』はほぼ一世代、『釈義』は二世代後からの批評であり、それぞれの世代における名物研究の変化を見ることができた。また、両書はともに師の講義を門人がまとめたものと推測される。それはつまり、蘭山・亡羊が『弁解』を用いて講義を行っていたことを意味する。後世の学者にとつて、諸文献に通じ観察に基づく情報を多く記載した『弁解』は、参照すべき「先行研究」の一つだったといえる。⁽³⁶⁾

おわりに

本稿は、日本で『詩経』名物学がいかに研究されてきたのか、

狩野文庫本の書入を端緒として検討してきた。

中国においては、魏晉南北朝に博識を競ったことを背景に「多識」の気風が高まり、宋学で新たな展開を迎えた。宋代以降は道德的かつ合理的な観点から『詩経』の草木鳥獸を解釈し、本草学や辞書など小学の分野で記述された形状や別名など博物学的成果と相互に吸収しあって展開していった。それでも『陸疏』は、原本は散佚したものの、最初期の名物書として宋代以降も参照された。

『陸疏』は日本へもたらされたが、中国同様、単独では失われ、『正義』や本草書の引用でのみ伝わったらしい。しかし、明末に収集された佚集本が再び江戸時代の日本へ流入すると、元禄十一年に和刻本が刊行され、人々の学ぶところとなった。

東北大学附属図書館狩野文庫所蔵本の書入はその痕跡の一つといえよう。書入の内容を検討したところ、享保十六年に刊行された江村如亭の『詩経名物弁解』と酷似しており、これを整理して転写したものではないかと考えられる。『弁解』は、『詩経』の名物について古典籍の考証だけでなく、日本に産する諸物の名称や用途などを記録しており、江戸時代に出版された日本の『詩経』の名物書として最初のものといえよう。

『弁解』が後世に与えた影響は大きい。後に小野蘭山や山本亡羊らが『弁解』の説に対して考証を行っており、各時代で『詩経』の名物を学ぶ儒医や本草学者らが参照すべき書物の一つであったといえる。こうした『弁解』の位置づけから再び狩野文庫本の書入を考えると、該本は『詩経』名物学の源流である『陸疏』に対し、日本における『詩経』名物学の大きな成果を落とし込んで知識を補完していることがわかる。これは、日中『詩経』名物学の基礎的内容を兼ね備えるだけでなく、当時の学習の有り様を伝える伝本といえよう。

稻生若水から松岡恕庵、そして江村如亭の『弁解』まで、また『弁解』から小野蘭山、山本亡羊という学問的展開は、『詩経』名物学が儒医や本草家の中で継承され、『詩経』の解釈を問う経学的関心よりも、むしろ形状など観察による博物学的な関心が高まっていくように見える。陳捷は、『詩経』解釈に本草学と博物学の研究成果が導入されたことにより、『詩経』の動植物に関する認識はより豊富かつ正確になっていったが、一方で、「これらの研究成果は後世においては必ずしも十分に利用されていない」とも指摘する⁵⁷⁾。本稿でもこれら名物研究が『詩経』の本文解釈にどのような影響を与えたのかという経学的問

題は検討することができなかった。今後は、本稿で採り上げられなかった名物書を検討するとともに、『詩経』解釈との関係について考えていくことが課題である。

注

- (1) 青木正児『中華名物考』（春秋社、一九五九年、三二三頁）。
- (2) 青木（前掲書、四頁）は『周礼』天官・庖人の「庖人、掌共六畜六獸六禽、辨其名物」を挙げる。
- (3) 『陸疏』佚集本の系統については、拙稿「陸氏毛詩草木鳥獸虫魚疏の基礎的研究―篇目から見る各本の相違」（『斯道文庫論集』第五十輯、二〇二五年）があるが、その後、王孫漣之が「今本『毛詩草木鳥獸虫魚疏』辨偽」（『文史』第三輯、二〇二〇年）でさらに考証を試み、拙稿に修正を加えている。王孫の論考を参照された。
- (4) 樂保群点校『毛詩草木鳥獸虫魚疏広要』（北京・中華書局、二〇三年）に拠る。
- (5) 中国における『詩経』名物書の概要については、呂華亮『詩経名物研究概述』（『詩経研究叢刊』第二十一輯、二〇二二年）や李耀平『詩経名物研究流變・反思与展望』（『詩経研究叢刊』第三十二輯、二〇二三年）に整理されている。
- (6) 青木、前掲論文。
- (7) 朽尾武『類書の研究序説（一）―魏晉六朝唐代類書略史』（『成城國文學論集』第十集、一九七八年）。
- (8) 加納喜光『毛詩草木鳥獸虫魚疏―詩経名物学の祖』（『しにか』第七卷第十二号、一九九六年）。
- (9) 毛伝は「鵲、鵲」とするが、「鵲」が現在のどの鳥に当たるのかは不明。ミソサザイ、カヅコウの他、ハヤブサなどの猛禽などと混同される。
- (10) 鄭玄箋「鵲言、已取我子者、幸無毀我巢。……」。
- (11) 朱熹『集伝』「公乃作此詩、以貽王。託爲鳥之愛巢者呼鵲而謂之曰「鵲鵲鵲、爾既取我之子矣、無更毀我之室也。……」。
- (12) 丁晴『詩経・幽風・鵲』と周公関係考論』（『詩経研究叢刊』第二十六輯、二〇二五年）。
- (13) 種村和史「詩経解釈学の継承と変容―北宋詩経学を中心に据えて」（研文出版、二〇二七年、四三―五五頁）。また、種村は宋学で提唱された先学への疑問はすでに唐の『正義』の中にも存在することから、従来言われる漢唐の学問と宋代の学問は対極にあつて断絶したものという認識は不十分であるという（同書、五

二頁。

- (14) 成林「論北宋新學學派的名物之學」以《詩經》草木研究為例」
(河南大學碩士學位論文、二〇二五年)。

- (15) 種村(前掲書、四九頁)も、宋代の「金斯」解釈の新しい動きとして、博物学的関心の高まりを挙げる。

- (16) 青木、前掲書、二二頁。

- (17) 四庫全書本に拠った。

- (18) 万暦二十四年序碁老山房刊本(国立公文書館、経八―十二)に拠った。

- (19) 李科「《詩經》与本草名物研究關係略論」(『医療社会史研究』第二輯、北京：中国社会科学出版社、二〇一七年)。明代の名物の博物学的要素については、羅聖堡「晚明《詩經》名物学草木類之博物学要素」以日本江戸時期同類著作爲参照」(『漢学研究』第四十二卷第一期、二〇二四年)がある。

- (20) 王孫涵之は姚士麟校本を現行佚集本の源流と見る(王孫、前掲論文)。

- (21) 『詩經』名物書の和刻本には徐鼎「毛詩名物図説」(小野蘭山訓点、文化五年刊)や許謙『詩集伝名物鈔』(文化十年刊、官版)がある。江戸時代の『詩經』名物書については陳健が経学との関

係から包括的に検討している(『経学註釈と博物学の間』(同編

- 『医学・科学・博物―東アジア古典籍の世界』勉誠出版、二〇二〇年)。

- (22) 檜村道菴がいかなる人物かは不明。

- (23) 「國史經籍志曰、毛詩艸木鳥獸蟲魚疏」二卷、陸璣著。聞名尚矣。

我邦浪速諸生檜村道菴家有舊藏之卷、書肆毛利田氏新寫之乞訓點于余。余加訓點付之、以爲多識於鳥獸艸木名詩也。其辯鳥獸艸木蟲魚之形狀者、璣之疏也。以此言之則舍疏何以哉。毛利田氏遂鏤梓流布于世。松下見林については『先哲叢談続篇』卷三に伝記がある。これによれば、見林は長崎に人をやつて書物を購入させるほどの愛書家で、十萬巻に近い蔵書があつたとされる。毛利田の出版活動については羽生紀子「京都・大坂出版メディアの動向―見林・益軒をめぐる」(『武庫川国文』第五十四号、一九九九年)に詳しい。

- (24) 『本草沿襲考』は写本のみで、伝本も多くはない。東北大学附属図書館狩野文庫所蔵本(狩八―三三九三〇―)は貞享四年(一六八七)の森中虚の書写奥書を存す中虚自筆本であり、かつ中虚の子孫である森立之旧蔵本である。『神農本草』から明代の重刊『証類本草』に至るまでの本草書の流れをまとめた内容で、

序文で『証類本草』の「本草序例」に基づくと述べる。伝本については太田由佳「松下見林述・森中虚書『本草治験考』について」、『近世京都』第三巻、二〇一九年）を参照されたい。

- (25) 拙稿②では、狩野の筆ではないかと推測したが、その後他本と比較しても決しがたいため、ひとまず書写者不明とし、筆跡の主については議論しない。

- (26) 「其鳴自呼」は和刻本にも、広要本などほかの版本にも見られない。江村如亭が参照した本がそうだったか、引用の誤りであろう。「其鳴自呼」すなわち、鳴き声が名称になっているという説明は『山海經』などにしばしば見られる表現である。例えば『本草綱目』巻第四十七「禽部」鵲鵲「の釈名に『案山海經云、沙水多犁鵲、其名自呼。後人轉爲鵲鵲耳』」とある。このような引用と混同したか。

- (27) 水上静夫によると、「梅」のうち中国の諸文献に「柑桼」「楠」とされる樹木は植物学上日本には産しないため、所謂「クスノキ」の和訓を当てるのは誤りであり、古くは「弁解」でも指摘されていると述べ、牧野富太郎が「なむ」と呼ぶのを是とする（『中国古代の植物学の研究』角川書店、一九七七年、四九六頁）。

- (28) 現行の『朱伝』は出典を明記せず、『陸疏』と同文を挙げており、

名物において『陸疏』を踏襲するところが少なくない。

- (29) 現行の『朱伝』は「其莖葉似澤蘭」。廣而長節、節中赤、高四五尺」とする。

- (30) 稻生若水『詩経小識』は巻八に退類略と題して古来草木鳥獣の名称とされてきたが実際はそうでない名称を収めており、「流離」をこの退類略に分類している。

- (31) 「杞」は「杞」の異体字である。地の文では「杞」を用い、資料の引用は原本の用字に従う。

- (32) 広要本（津逮秘書所収）の篇題下には小字で「舊刻集于苞杞非」とある。

- (33) 伝本の多くは半紙本に製本されているが、データベース等の書誌情報を見る限り、唐本屋八郎兵衛本は大本に作るものが見られる。例えば、大谷大学附属図書館「外大八三三」や長野県立大学図書館（二二二二二四）など。

- (34) 巻「尾題および巻三卷首題は、詩経物類辨解」とする。

- (35) 唐本屋八郎兵衛は、正徳四年刊稻生若水校訂『本草綱目』を刊行した版元の一つであり、如亭の師である松岡恕庵が著した『用薬須知』も岡村彌兵衛との相板で出版していることから、若水や恕庵一門に近い版元であったと想像される。

- (36) 管見の限り、巻一の二十八・二十九張、巻二の九至十二張、巻三の二十五至二十八張、巻四の九至十二・二十三張、巻五の五至八、巻六の九張が補刻である。

(37) 陳捷、前掲論文。

- (38) 『詩経小識』の伝本は拙稿「稻生若水撰『詩経小識』の伝本調査(二)」「斯道文庫論集」第五十六輯、二〇一三年「同(二)」(斯道文庫論集)第五十七輯、二〇一三年を参照されたい。『詩経』の名物研究で同時期と思われる著作としては、松岡恕庵『詩経名物考』(国会、特一一〇九二)があるが、成立年不明。本書については後述する。

(39) 松岡恕庵の『用藥須知』には江村穀庵の序が付されており、親交が深かったと考えられる。

(40) 太田由佳「松岡恕庵本草字の研究」(思文閣、二〇一二年)。

(41) 太田、前掲書、一二頁。

(42) 太田、前掲書、一五六頁。

(43) 如亭撰『聚芳帯図左編』の自序にも「而似知愛花而非真愛也。亦似獲貴寵而非真貴也。於是乎人與花共失實。風流社中之一厄也。故諷詠于詩、佩紉于騷者棄擲不顧遑焉。(中略) 祇欲辨其物正其名、使一艸一木各得其所者有識之不置也。(中略) 而

辨物正名之要精審焉(中略)享保丁未秋八月洛下江村(如圭)序」とあり、同様の姿勢が見える。本書は花卉類を四季で分類し、漢籍を引用した解説に図を附したものの。図は郷友で画家の楊汀氏とその門人・南畝に加えて如亭自身も筆を執ったことが序に記されている。杏雨書屋の自筆稿本(貴一九五)をはじめ、国会図書館(わ四九九一四、特一九六二)や岩瀬文庫(二八一九九、図なし)に写本が数件伝存している。

(44) 太田、前掲書、一七頁。

(45) 恕庵は特に『詩経』を好み、その名物を理解するために若水に入門したとされる(伴高蹊撰「宗政五十緒校注」近世畸人伝・続近世畸人伝)平凡社、一九七二年、三二二頁)。

(46) 管見の限り伝本は国会図書館本のみである。該本は江戸後期頃の写本で巻首に「北川博養集／松岡恕庵考」とするが、北川博養は未詳。「小識」や「弁解」のように草木鳥獸に分類するのではなく、『詩経』の編次に従ってその詩の中に見える動植物を挙げる配列をとる。陳捷(前掲論文)は、本書は恕庵の弟子か後人が収録して二書と成した可能性があると指摘する。筆者も同様に考える。本書は成書年代が定かではないが、「鵜」の条に「享保六年於京泗水觀之」とあることから、これ以降であろう。

ただ、この一文は末尾に附されていることから、書写者の経験を記したものとも考えられる。

(47) 遠藤正治「水野皓山と山本読書室」〔日本医史学雑誌〕第三十卷第二号、一九八四年。

(48) 岩瀬文庫本は和半二冊、淡縹色表紙(三・五×十六・六)欄、左肩子持枠題簽を貼付し「江村如圭採覽随録」と墨書、紫色角裂あり、卷首「採覽随録／(低九格) 平安 江村如圭著／(低十二格) 水野廣業編次／(低二格) 丙申 〔始自四月念八日終／於十一月十三日〕」、大字にて品名を掲げ、一格空けて小字双行にて形状や他との弁別、開花時期、採取時期及び場所などを記し、葉の形状などを図示、漢字仮名交じり文、漢籍の引用は漢文、每半葉六行、每行字数不定、字面高さ約十七・五欄、墨付き六・十丁、一筆皓山自筆とされる。杏雨書屋本は和半二冊、淡縹色巾繫地雲文空押表紙(三・〇×二・六・四)欄、左肩子持枠題簽を貼付し「採覽随録上(下)」と墨書、淡黄色角裂あり、内容は岩瀬本と同じ、墨刷「讀書室藏」罫紙、左右双边十八・七×十三・七欄、每半葉十行、每行二十字前後、形状なども全て大字二行に書写、墨付き第二冊六十二丁、第三冊六十丁、一筆「六戸昌／藏書記」方形陰刻朱印記あり。

(49) これら恕庵とのやりとりについては太田がまとめている(前掲書、二〇〇―二三頁)。

(50) 享保五年(一七二〇)、恕庵と同じ若水門下の丹羽正伯や野呂元丈らが幕命によって「採葉使」として江戸から伊豆や相模などで採葉を行ったのはじめとして、享保年間各地の薬種・物産の調査研究がたびたび行われた。享保七年(一七三二)には野呂元丈らが上野・越後・佐渡・越中・飛騨・越前・近江を回って採葉を行っている。(磯野直秀「日本博物誌年表」平凡社、二〇三・二三四頁)。

(51) 『正誤』は三田村清三郎等編『日本芸林叢書』(第三卷、六合館、一九二八年)に翻刻が収録されており、解題に「考証的確遺憾なしと謂ふべし。辨解を繕くものは亦この正誤を併覽せざるべからず」と評す。本稿では国会本に拠った。国会本は和大二冊、新補焦茶色表紙(三・五×二・七・四)欄、左肩子持枠題簽を貼付し「詩經名物辨解正誤 全」と墨書、新補副葉子二張をはさみ、原表紙あり(本文共紙、打付にて「詩經名物辨解正誤 全」と墨書)。卷首「詩經名物辨解正誤／(底二格) 蘭山小野先生口授／(低二格) 草部／荇 アサ、ノ説可也……」、無辺無界、每半葉九行二十字前後、字面高さ約一九・〇欄、漢字仮名交じり文、

墨付き五十五張、尾題「詩經名物辨解正誤大尾」、朱筆にて校注あり、「白井／光」方形陽刻朱印記あり。このほか、杏雨書屋(杏三六三)があるが未見。

(52)

国会本は眉上に本文同筆にて「本書作梅即柚」と標注あり。

(53)

蘭山にはこのほかに「詩經名物弁解紀聞(外題「詩經名物弁解説」)(杏雨書屋、杏四一四七)があり、寺尾長節が蘭山の七著作を摘録し「蘭山七種」と題した叢書に収録されている。香色表紙(二・五×二・六・〇)種、左肩打付にて「蘭山七種」

九

共九、右肩より「詩經名物辨解説／十品考／藁筵小牘」と墨書。副葉子二張、卷首「詩經名物辨解紀聞草木部／(低二格)草部／苻アサ／説ヨシ總体説ヨシ萍蓬ハ大ナリ苻菜ハ小ナリ……」第一巻以降は巻数あり(二巻草部)等、無辺無界、每

半葉十二行三十三字前後、字面高さ約十九・五種、漢字仮名交じり文、本文同筆校注、墨付き二十七張、末尾に別筆にて旧題云文政六癸未年臘月／下旬写」と墨書。また、杏雨書屋には著者不明の「詩經名物辨解記聞」(杏三六七)と題する一本が蔵されており、「蘭山七種」所収本と同じ内容を持つ。さらに、文言の違いこそあれ「正誤」とも内容が近い。これらと「正誤」との関係についてはさらなる検討を要する。ほか、蘭山の「詩經」

名物書には「詩經産物解」(国会図書館、特二五八二)などがあり、これらも今後の課題である。

(54)

遠藤正治編「読書室二〇〇年史」(山本読書室、一九八一年、三一四頁)。

(55)

田龍博「松江藩医学校教授山本家の事跡」(「島大言語文化」第六卷、一九九八年)参照。杏雨書屋本(杏五二九〇)は半一冊、縹色布目表紙(三・六×二・六・四)種、左肩に紙箋を添付し「詩經名物辨解釋義」(完)と墨書、同野紙副葉子二張、卷首「詩經名物辨解釋義／(低二格)亡羊山本先生講述／(低三格)出雲藩簡齋山本良臣徵聖録／(低二格、朱圈点)草部／苻此条宜シ根ハ水底ニアリ葉ハ水上ニ浮フ故ニ水フカケレハ……」、墨刷「雲藩茶梅園藏板」野紙、四周单边(十七・五×十三・八)種、每半葉十二行、每行二十六字前後、版心白口單黒魚尾、漢字仮名交じり文、不分巻、墨付三十四張、一筆、和名朱引、漢名朱圈点あり。

(56)

このほか、「弁解」への批評としては、小原良直編・小原桃洞鑒定「詩經名物弁解正誤」七卷(關卷五・六、大阪府立中之島図書館、石崎二八三・三二六)がある。小原桃洞(二七四六・一八三五)は紀伊の本草家で、蘭山に本草学を学んだ。良直はその孫に当たる。

また、小原桃洞に本草学を学んだ畔田翠山（七九一―一八五九）にも『詩經名物弁解紀聞』七卷（存卷一至三、杏雨書屋、貴二八、自筆稿本、南葵文庫旧蔵）があり、これらについては稿を改めて検討したい。

（57）
陳捷、前掲論文。

〔附記〕

本稿は日本学術振興会研究基金・若手研究「和漢名物学関係文献の基礎的研究―書誌調査および解題目録の作成」（二四K二六〇三八）の成果の一部である。

